

5) 教室における大腸非上皮性腫瘍症例の検討

齋藤 英俊・石川 裕之
 荒木 智恵子・島村 公年
 千田 匡・瀧井 康公
 鹿嶋 雄治・須田 武保
 井上 雄一朗・畠山 勝義
 武藤 輝一 (新潟大学第一外科)

1970～1989年の20年間に当教室で手術を施行した大腸非上皮性腫瘍の症例は8例で、同期間における大腸癌手術例664例に比べ1.2%の割合であった。

大腸非上皮性腫瘍は稀な疾患であるが、第11回大腸癌研究アンケート調査では、3276例の報告がある。このうち悪性腫瘍は249例で、大腸癌19850例に比べ1.3%の割合で、悪性リンパ腫が最も多く、次いで平滑筋肉腫、悪性黒色腫の順であった。

我々が経験した8症例の内訳は、脂肪腫2例、悪性リンパ腫3例、平滑筋肉腫2例、悪性黒色腫1例であり、年齢は、34才から70才までで、平均51.8才、性別は、男性3例、女性5例であった。悪性リンパ腫、平滑筋肉腫、悪性黒色腫について各々一例ずつ症例を呈示し、診断、治療等について若干の文献的考察を加えて報告する。

第52回新潟消化器病研究会

日 時 平成2年7月7日(土)
 午後1時30分より
 会 場 新潟東映ホテル

一 般 演 題

1) 最近経験した早期食道癌の2例

田中 泰樹・朴 鐘千 (南部郷総合病院)
 渋谷 隆・前田 裕伸 (内科)
 中山 卓・篠川 主
 鰐淵 勉・佐藤 巖 (同 外科)
 岩淵 三哉 (新潟大学第一病理)

症例1は60才男性。1989年12月25日胃潰瘍の吐血にて入院。1990年1月9日内視鏡検査にて上門歯列より33cmの下部食道にわずかに発赤した隆起性病変認め、同部生検にて中分化型扁平上皮癌と診断。2月20日胸部食道全摘術施行し14×12mmのⅡbで上皮内癌であった。

症例2は62才男性。1990年3月6日頃より心窩部不快感あり。内視鏡検査にて上門歯列より30cmの距離で縦走する平坦な発赤病変認む。ルゴール染色にて不染帯となり、同部生検にて中分化型扁平上皮癌と診断され、4月25日胸部食道全摘術施行。口側より、21×6mmのⅡb、6×4mmのⅡc、3×2mmのⅡb、2×2mmのⅡbのいずれも上皮内癌を認めた。

両症例とも術後経過は良好にて観察中である。

2) In vitro BrdU labeling 法を用いた食道癌上皮内進展部の増殖活性の検討

多田 哲也・岩淵 三哉
 渡辺 英伸 (新潟大学第一病理)
 黒崎 功・田中 乙雄
 武藤 輝一 (同 第一外科)

食道癌上皮内進展部(ie)の増殖活性をBrdUを用いて検討した。対象は食道進行癌12例のie部である。上皮全体のBrdU標識率(LI)はHA(高異型度)-PD(低分化度)23.7%、HA-WD(高分化度)20.0%、LA(低異型度)-PD16.7%、LA-WD11.0%の順に低下した。増殖活性は高異型度、低分化度の領域で高いと考えられた。すべての領域でLIは基底部-中間部-表層部の順で低下した。高分化度の領域では特に表層部のLIが低値を示した。これは著明な層状分化のた